



岩江中だより

第 28 号

発行日:平成27年10月16日

発行:三春町立岩江中学校

電話:0247-62-8290

FAX:0247-62-8380

E-mail:school@iwae-j.fks.ed.jp

学校経営基本方針『こころ豊かに』～「共に」語り合い、分かち合い、成長する学校～

【県P二本松大会に参加してきました。～本当の空にPTA会員が集いました！～】

10月11日(日)、二本松市において、平成27年度第63回福島県PTA研究大会二本松大会が開催されました。本校よりは伊藤会長と校長が参加してまいりました。会長さんは田村P連会長の立場で役員としてもご活躍なされておりました。

受付のあと分科会からの開始となりました。会長さんと校長は第1分科会に参加し、県P連をとおして交流のある九州水俣市の水俣病資料館の「語り部」である杉本肇先生の講演をお聞きしました。

水俣病という過酷な困難を抱え、差別や偏見に苦しみながらも、地域の自然や風土、そして、人と人とのつながりを再起させ、地域の再生のために尽力し続けている杉本先生のお話でした。水俣病の歴史とその病との戦い、そして、復興と、福島県と重なる部分もありました。ご講演の概要をお伝えいたします。



【演題】「起きたことに学び、ここに生きる希望をつくる」

【講師】水俣病資料館「語り部」杉本 肇 先生

水俣病発生から59年が経過しました。水俣は不知火海に面した漁村であり、チッソの化学工場では7万人の社員が働き、水銀が含まれた排水が海に流れ出していました。当時、水俣は鳥が空から降ってきて、猫が全滅し、家畜も死に、子どもやお年寄りには茶碗を持てなくなる人もいました。動けなくなる奇病と言われ、後から分かることですが、その奇病は水銀が体にたまり脳を冒すことが原因というものでした。水銀の混じった排



水が生態系の中で濃縮され体内に入る。水俣湾沿岸の人々はたくさん魚を食べ、それがもとで発症しました。当初、その発症地域が徐々に広がっていくことから、その奇病は伝染病と考えられました。水俣チッソ病院が患者の発症例を保健所に報告し、それから59年です。

杉本家の祖母もけいれん発作を発症し「マンガン病」という診断を受け、保健所が家中を消毒し、「うつるから。」「うつるかも。」ということで隔離病棟に入れられました。水俣には、母親がこの病気で亡くなった我が子を抱え病院から家に帰るのにタクシーにもバスにも同じ理由から乗せてもらえないということもありました。祖母が少しよくなって退院し帰ってくると、村人からは、「何で帰ってきた。」「村を歩くな。」という言葉が投げつけられました。差別や偏見の問題がそこにありました。

そうしているうちに、祖父も手足のしびれを訴えだしました。昭和44年、私(杉本肇さん)が小学2年の時でした。祖父は漁から「寒い。寒い。」と言って帰ってきて、やがて体が硬直し、救急車で病院に運ばれ、2週間後に亡くなってしまいました。わたしは母親から、「水俣病だ。」と伝えられました。チッソが病気の原因企業と分かって工場の排水が止められた1年後のことでした。

祖父が亡くなる1年前、病気の原因企業のチッソを相手に裁判を起こすことになりました。原告3人のうち2人はチッソ側の切り崩しにあい祖父1人だけになりました。公害病の裁判を起こし1ヶ月半後に祖父は亡くなり、私の父母が裁判を引き継ぐことになりました。祖母は半狂乱になりました。チッソの企業城下町の水俣では裁判へのさまざまな圧力がありました。

そして、父母の様子もおかしくなりました。母親は産後子どもを抱くことができない痛みを抱え、父親は足の痛みや頭痛、手足がつるといった症状がありました。祖母は言語障がいになり、正面は見えるが周囲が見えないという視野狭窄という症状もみられました。教室で勉強していると



救急車の音が気になりました。よくない知らせを持って校長先生が教室に来ないようにとも願っていました。

入退院を繰り返す大人たち、小学5年の時、母親から「両親一緒に入院する。」と告げられました。水俣から100キロも離れた熊本大学病院でした。母を恨みました。「どうして弟たちを残していくんだ。」と。入院のことは友達にも先生にも言えませんでした。差別が心配でした。水俣病にふれてはいけないという空気が水俣にはありました。小学生3人、就学前の子どもが2人、いつも両親の死を恐れていました。

そんな中、夏休みにはボランティアの大学生が患者の家に入り、手伝いや炊事をしてくれました。ただし、漁には役立ちませんでした。大人がおぼれるのを私は初めて見ました。夜は日本各地の話をボランティアの大学生から聞きました。絆が広がりました。剣道の防具を贈ってもらったり通知票の家庭欄に大学生が代筆してくれたりしました。そこにいてくれたボランティアの大学生に今でも感謝しています。

夏休みが終わるとまた兄弟5人になりました。3つの布団に5人が蚊帳をつつて寝ていました。4歳、5歳、小1、小4、小5の5人兄弟でした。いちばん上の私はある時弟たちがサロンパスをいじっていたので、「何でサロンパスを持ってきた。」と咎めました。弟たちは泣き止みませんでした。1年生の弟が後で下の2人のしたことを教えてくれました。「サロンパスはお母さんの匂いがする。」と言ってお母さんのことを思い出していたそうです。両親が帰ってきました。反発をしていた母親への見方が変わりました。病気で寝ていても玄関から入ってくる子どもたちのその声だけで様子がよく分かっていたのです。

小学校6年生の時、水俣病の裁判の判決で学校を休みました。父親が、「おまえが戦ってくれたから一緒に判決を聞かせたかった。」と言われました。勝訴しました。その後は水俣病の認定作業が待っていました。祖父母は認定を受け、補償金や年金も入り経済的には豊かになりましたが、「働かなくていい。」という言葉には怒りを覚えました。報道される水俣と自分の住む美しい水俣の現実とは大きくかけ離れ、負の部分だけが繰り返し報道されました。

母親も水俣病の認定を受けました。「おら水俣病になった。」という言葉には、水俣病は治る病気ではなく、一生涯死ぬまで負っていかねばならない病気なんだという苦しみや悲しみの気持ちが込められていました。認定されるということはそういうことなのです。

私は明るく振る舞うようになりました。病気に対する「覚悟」、「希望」は子どもたち、「魂を込め」生きることをあきらめない母、そして、父。私は漁の他、みかんも作っています。食品公害で自らが加害者とならないため、無農薬のみかん、無添加のいりこを販売しました。売れませんでした。しかし、売れなかった当時、支援者が福岡、熊本などをそれを持ってリヤカーで回ってくれました。アトピーの子を抱える母親が、「無農薬なんですね。」と言って買ってくれました。少しずつみかんが売れるようになるまで10年がかかりました。母親は7年前、父親は今年の6月に亡くなりました。

水俣の友人の母に胎児性の水俣病の子をもった人がいます。母親が食べた魚で胎児が病気になって生まれてくる。目が見えない、手足が動かない、母親はその子を抱いていつも外を歩く。「この子は宝子なんです。」と母親。「この子が私の毒を全部すってくれたので私も助かり下の子も大丈夫だったんです。」と。これが水俣の、杉本の歴史です。

水俣には、魂を込めて生きていた60年の証があります。水俣を見てください。福島にも歴史があります。水俣病資料館には語り部が12人おられます。20年前から始まりました。それまで水俣のことは語ってきませんでした。水俣病のことを学んでいない自分はそのことについて質問され答えることができませんでした。東京の友人が水俣病者のまねをしているのをただ笑って見ているだけの自分でした。水俣の人自体が水俣で起こったことを分かりませんでした。「それではいかん。」「あったことに学ぼう。」と資料館ができました。「おれに語らせてくれ。」水俣から差別がなくなりました。子どもたちに対しても話し始めました。「水俣出身です。」と言えない現実、水俣で起きたことを学ばなければならない。そして、「水俣出身です。」と言える子どもが増えました。

水俣と福島の交流は、被害や差別について水俣の子どもたちが福島で学ぶ交流でもあります。水俣は今「環境の町」であり「人権の町」です。22種類のゴミの分別をしています。水俣病を経験した水俣が為すべきこと、「水俣病の水俣」を克服したい。水俣病で最も傷ついたことは、病気に対する「差別」です。「差別はいかん。」これを伝えたい。12月には今年も福島の子もたちとの交流があります。